

学生懸賞論文の総括

例年通り、今年度も多くの学生諸君は日ごろの勉強・研究成果をまとめ、応募してくれた。刊行委員会では、まず投稿規程、募集要項等に照らし、応募論文を予備審査の上、専門分野の近い教員2人に本審査を依頼した。そして、各審査員の評価結果と選考基準に基づいて入選作を検討した。その結果、優秀作2編、佳作2編、準佳作5編が選ばれた。

昨年度の応募件数(92編)を大きく下回った56編の中から、昨年度とほぼ同じ本数の入選作が残った。その意味で、今年度の応募作の平均水準が大きく上がっているといえる。明確な問題意識を提示した後、①先行研究を読み、自らの研究課題を設定する、②適切な方法で資料を収集、分析する、③研究で分かった事実等をまとめる、という比較的オーソドックスな手順で、自分の言葉でまとめられたところに入選作の共通点が見出される。

一方、入選を果たせなかった作品には、上述した諸点の主要部分が欠け、結果的に完成度の低いものとなったケースが多い。専門演習等の場を活かし、長い文章を書く訓練をさらに磨いていけば、よりよい論文が書けると思う。一層の努力を期待したい。

最後に、年末年始の忙しい時期に、論文審査を快く引き受けて頂いた先生方に、心から感謝の意を申し上げたい。

2011年3月

学生論集刊行委員会

巖 善平(経済学部)
大倉 季久(社会学部)
村上 伸一(経営学部)
村中 淑子(国際教養学部)
天本 哲史(法学部)